

特別寄稿

韓国のテンプルステイを体験して

フリーランス・ライター 北出 明
(元 JNTO コンベンション誘致部長)

「韓国のテンプルステイの体験ツアーに参加しませんか？」

4月のある日、このようなメールが飛び込んできた。差出人は在ソウルの(株)インターナショナル・コミュニケーションの李漢錫(イ・ハンソク)社長。数年ぶりに目にする懐かしい名前だ。私がソウルに駐在していた1993年から98年までの5年間、仕事の上で付き合いのあった間柄で、当時、李さんは宮城県ソウル事務所の現地職員として日本人所長の右腕の役割を果たしていた。その後、彼は独立し、日韓間の観光交流の事業を立ち上げた。以来20年近くの間で着実に地歩を固め、今や日本の47都道府県のほとんどの自治体と提携するほどの躍進ぶりである。

ところで、「テンプルステイ」とは日本ではまだ耳慣れない言葉だが、“韓国版宿坊”と考えればわかりやすい。2002年のサッカー・ワールドカップが開催された際、外国人旅行者に韓国の文化と仏教に触れてもらおうとの発想から生まれたもので、現在では韓国仏教文化事業団の運営の下、韓国観光公社の支援を受けて普及が進んでいる。

一方、現代の韓国社会は急速な発展に伴い都市化が進み、都会の人々は自然の中での休息と癒しを求めるようになってきているが、テンプルステイはそのニーズにもうまく適合している。まさに、インバウンド及び国内旅行を促進する上で“一石二鳥”の施策と言えよう。

さて、今回のツアー体験を以下の通り日誌風にご紹介したい。

6月5日(水)

参加者数は、旅行会社と旅行メディアの関係者合わせて23名。私は執筆活動を行っていることからメディア関係者として扱われた。国際観光振興機構(JNTO)の現役時代、ファムトリップやプレストリップを主催者として何度も実施したが、よもや招待される側になろうとは思ってもかけないことだった。

初日の最初の訪問先は、韓国仏教の90%を占めると言われている曹溪宗の総本山である曹溪寺(チョゲサ)。実はこのお寺はソウル市内の人気観光スポットの一つである仁寺洞(インサドン)のすぐ近くに位置し、浅草の浅草寺の韓国版といった存在である。中に足を踏み入ると、釈迦の誕生日(旧暦4月8日)の行事に使われた提灯が頭上いっぱい張り巡らされ、境内一帯を鮮やかに彩っている。



曹溪寺の境内

©(株)インターナショナル・コミュニケーション

金色に輝く大きな仏像が安置されている大雄殿では信者とみられる多くの一般市民が熱心に経典を読んでいる。ソウルに駐在中、韓国の友人に誘われて何度かキリスト教会を訪れたことがあるが、その時に感じた一種異様な雰囲気とは違い、ここではなにかホッとさせる心の安らぎがあった。

参拝の後は道路を隔てて正面にあるテンプルステイの広報館に移動し、「パルウコンヤン（鉢盂供養）」という名前のレストランで精進料理を味わった。肉や魚はいっさい使わない穀物や野菜だけのコース料理だが、材料の持つ本来の味や香りを引き出しながら、精進料理ならではの格調の高さを味わわせてくれる。

この日の夜は、レストランから徒歩で数分の場所にあるセンターマークホテルに宿泊。開業間もない都市型ホテルで、快適そのもの。明日からの、山中のお寺での宿泊体験に備えて今夜はどうぞごゆっくり、といった主催者の心遣いが窺えた。

6月6日（木）

午前8時にホテル出発。目的地は韓国東北部の江原道にある五台山に抱かれた月精寺（ウォルチョンサ）。途中、テレビドラマ「冬のソナタ」のロケ地として有名になった南怡島（ナミソム）に立ち寄った。島に渡る船の乗り場は大勢の観光客で溢れておりビックリ。「冬ソナブーム」がまだ続いているのかと思いきや、この日は韓国の祝日で家族連れが大半とのこと。ドラマ



月精寺の中核をなす寂光殿

の象徴的シーンとなった雪が積もるメタセコイヤ並木も、雪も無く汗ばむ陽気の下では興醒めもいいところだった。ところで、南怡島と言えば、かつて韓国銀行（韓国の中央銀行）の総裁を務めた人物が退職金を全額つぎ込んで島全体を買い取り、「島に鳥を呼び戻すために」としてゴルフ場をはじめとする観光施設をすべて取り壊し、樹木と花に植え替えたという逸話がある。ドラマに熱中していた日本のファンは果たしてそのことを知っていただろうか。元総裁の英断が無かったなら、一世を風靡したドラマもあれだけの共感を得

ることが出来なかったかもしれない。

さて、目的の月精寺には午後4時ごろに到着。早速、修業服に着替え、動画を見ながらテンプルステイの意義や寺の中における作法などを学ぶ。その後は食堂で早めの夕食。前夜のレストランとは違い、きわめて質素な精進料理で、一粒のご飯も残さず食べ、食事中は私語を慎み、終われば自分で食器を洗う。寺では「食事」とは言わず「供養（コンヤン）」と言う。食事をするのも供養の一つという考えによるものだ。

夕方の礼仏に先立ち、鐘鼓楼の前に集合。6時になると僧侶が太鼓を叩き始める。そのリズムは一定ではなく、叩く場所によって音色が異なる。目を閉じて耳を澄ましていると、太鼓の音が自分



鐘鼓楼前で梵鐘を聞く

の心に同化してくるような感覚になる。太鼓が終わると、参加者が二人一組となって梵鐘をつかせてもらう。そこには死んだ人に仏の教えを伝えるという意味が込められているとのこと。

梵鐘の後はいよいよ本堂の寂光殿での礼仏だ。前日の曹溪寺の大雄殿と同様、眼にもまばゆい金色の釈迦牟尼仏の像。その斜め前で木魚のリズムに合わせて五体倒置（立ち姿勢から、拝みながら、しゃがんで、座って、うつぶせで寝て、座って、立つ、を繰り返す伝統的な礼拝の作法）を行う。これは初心者にとってはちょっと難儀な動きだが、これも修業の一つである。

この後は、両脇の仏画を眺めながら般若心経を読む。漢字に仮名がふってある日本のお経とは違い、漢文を口語的な韓国語に訳したものであるため、ハングルが読めないとお手上げである。ただ、読経のリズムはなんとなく日本で耳にする般若心経と似通っているようだ。

次は、寂光殿の脇にある大講堂で慧行僧侶との対話の時間。お茶とお餅をいただきながら打ち解けた雰囲気でお話し合うのがねらいである。最初は、「冬のソナタ」のヨン様ことペ・ヨンジュン氏もここを訪れたといった話から始まり、次第に韓国と日本の仏教の違いについての話へと発展していった。

「日本の仏教が学問的に世界のトップレベルにある一方、修業の面で発展したのが韓国の仏教であるということが出来ると思います。また、日本では僧侶の妻帯が許されていますが、韓国の僧侶には家族を持つことが許されていません。俗世間の人々が求めるもろもろの欲望に関しては、僧侶といえども逃れることは出来ません。それらの欲望がなぜ存在するのか、それらとどのように向き合えば幸福につながるのかということを追及するのが僧侶の生活なのだと思います」

心に残る慧行僧侶の含蓄のある話を胸に、次の日の早朝起床に備えて 9 時に就寝。板張りの大部屋の床に薄い敷布団を敷き、男性組 11 人が雑魚寝という困惑しながらも楽しい経験であった。

6月7日（金）

午前3時50分。境内を巡る木魚の音で目を覚ます。手早く洗顔を済ませ、寂光殿で朝の礼仏。厳肅、荘厳といった雰囲気に眠気もどこへやら。この早朝の勤行はテンプルステイの圧巻と言える。

次は法輪殿に移動して 108 数珠作り。108 回の五体倒置を繰り返しながら小さなナツメの実の穴に細い紐を通す作業はかなりの根気と体力が要求される。し



法輪殿での 108 数珠作り



月精寺近くの石碑群

かし、108 個のナツメに心を込めて作り上げた数珠は貴重な記念のお土産となった。

朝食の後は月精寺滞在の最後のプログラムとなった周辺散策だ。前夜の慧行僧侶の先導で案内されたのは、梵鐘の形をした大小さまざまな石碑が立ち並ぶ場所だった。ここは月精寺に関係した僧侶たちの墓地と

のこと。墓地と言っても背後は緑鮮やかな樹木に囲まれ、頭上は明るい空が一面に広がっている。

「ここは私の最も気に入った場所で、将来、先輩たちと一緒にここに入るのが夢なのです」
またしても、慧行僧侶の言葉には心が洗われる思いだった。

さて、第二の目的地は同じ江原道の襄陽郡にある洛山寺（ナクサンサ）である。新羅時代の僧侶で華嚴宗の開祖である義湘大師が建立した寺で、海との調和が美しいことで有名だ。本堂である円通宝殿には宝物第 1362 号に指定されている乾漆菩薩像が安置されている。高麗後期の作と言われるこの仏像は韓紙で作られた珍しいもので、豪華な冠をかぶっており、特に顔の表情が群を抜いて美しいことで知られている。

ここから「夢がかなう道」と名づけられた小道を通っていくと、海を見下ろす海水観音菩薩像が現れる。高さ 16 メートルもある菩薩像で、全羅北道の益山から取り寄せた花崗岩で作られている。海の方へ下りていくと、義湘台と呼ばれる見晴らしのよい小さな建物に出会う。義湘大師がこの寺を建てるときに山の状態を調べた場所と言われ、景観の素晴らしさから「関東八景」の一つに数えられている。



洛山寺の紅蓮庵

さらに海岸線に沿っていくと、小ぢんまりとした建物が見えてくる。紅蓮庵だ。これにまつわるエピソードが面白い。観音菩薩に出会うためにやって来た義湘大師がここで青い鳥に出会った。

その鳥が姿を消した石窟の前で 7 日間祈り続けたところ、海の上の紅の蓮の花に乗った観音菩薩が現れたという。そこで、ここに庵を建て、紅蓮庵と名づけ、また、青い鳥が消えた石窟を観音窟と呼ぶようになったという。

洛山寺は 2005 年 4 月に起きた山火事によりほとんどの建物が焼失し、美しさを誇っていた景観が大きく損なわれたが、多くの国民に支えられ、新しい千年寺刹として一步一步完全復活に近づいている。ここでのテンプルステイは、火事による建物消失が逆にプラスに作用し、施設は新たに増築され、しかも、参加者が静かに修行に専念できるよう、観光客が入ってこない場所に建てられている。

この日の夜は、洛山寺に近い東草市内のマレンモスホテルに宿泊した。チェックインの後、参加者全員が会議室に集合し、意見の交換を行った。その際、参加者側と主催者（韓国仏教文化事業団）の質疑応答の様様を以下にご紹介しよう。

Q. の内容：

- ・私たち女性はどうしても水回りのことが気にかかります。洗面所、トイレ、シャワールームなどの設備は大丈夫でしょうか？（女性ライター）
- ・この地域は冬季は相当寒いと聞いています。部屋は韓国独特のオンドルで温かいと思いますが、シャワールームと宿泊部屋は離れていて、シャワーの後、部屋に戻る際に風邪を引かないか心配です。（女性の旅行会社社員）

- ・日本では一般家庭でもトイレはウォッシュレットがかなり普及しています。その辺の事情も考慮してほしいです。(男性ライター)

A. の内容：

- ・この制度がスタートしたとき、国からの援助があり、トイレはすべて水洗式に改造したほか、シャワールームも完備するようにしました。
- ・テンプルステイの趣旨は、自然に囲まれた寺で仏教の心に触れ、修業の一端を経験してもらうことであって、宿泊を提供するのが主目的ではありません。したがって、それなりの不便は我慢してもらう必要があると思います。

以上のやり取りを聞いていて、ふと、あることを思い出した。それは、もう 40 年以上も前の話。さる有名な日本の禅僧がフランスに禅の普及に出向き、パリのブローニュの森で野外研修会を催した。禅に対する関心は高く、大勢の参加者が詰めかけた。中にはパリの上流階級のセレブ夫人も交じっていた。野外のためトイレの設備もなく、穴を掘って急場をしのいだというのだ。人間の本然に触れることも禅の修業の一つなのかも知れない。

6月8日(土)

いよいよ最終日となり、一行は帰国のため仁川国際空港を目指すことになった。途中、ソウル市内に入り、最後の訪問箇所である津寛寺(チングァンサ)に立ち寄った。ソウルの中心から車で数十分のところに位置する“都会派”のお寺である。ここは、尼僧の修業の場であり、出迎えてくれた法海僧侶も尼僧で、可憐な少女と見まがうほど小柄な方だった。



津寛寺の住職、法海僧侶

西方に位置するこの津寛寺は、東の仏巖寺、南の三幕寺、北の僧伽寺と共にソウル近郊の4大名刹に数えられている。高麗時代の1011年、時の王であった顕宗が津寛大師のために創建



独立運動に使われた太極旗

したものだが、朝鮮動乱時の爆撃で廃墟と化した。しかし、現在は見事に再建され、朝鮮時代に王室の霊を慰め、民心を安定させるために行われていた国行水陸齋が今に継承されている。大雄殿をはじめ大小10余りの建物があるが、その中に子供のために祈る七星殿がある。朝鮮動乱後の解体再建工事を行っていた際、この七星殿から、日本の植民地支配からの独立運動に使われた太極旗が発見された。これを説明する掲示板

が七星殿の脇に立てられており、見る者を驚かせる。一世紀前の日韓の厳しい歴史に直面させられ、思わず肅然となった。韓国に来ると、単なる観光旅行であっても必ずこのような場面に

出くわすのは避けられないことかもしれない。

さて、昼食時間 ——。

「わが寺の自慢は、全国一の味を誇る精進料理です」

法海僧侶の説明で期待を膨らませながら味わった精進料理は、さすがに期待を裏切らなかった。主に山菜を中心とした料理で、食材はここで栽培された天然のものが多く使われている。一般客の場合、代金はお布施という形で気持ちを表せばいいとのこと。



津寛寺自慢の精進料理

都会の中にあるお寺だけあって、テンプルステイ用の施設は宿泊部屋、食堂、洗面室、シャワールーム、トイレ、いずれもホテル並みの清潔さで、なんとトイレはウォッシュレット付きであった。思わず、我々一行のガイドさんが、

「みなさん、ここのトイレはウォッシュレットが付いていますよっ！」

と叫んだ。

「なにも、そこまでしなくてもいいのに……。かえって興奮めしちゃうよね」

とは、いつも冷静な言動で参加者から一目置かれていた女性ライターさん。

最後の締めくくりとして、法海僧侶を囲んでの意見交換会が始まった。各参加者の前にはお茶と蓋の付いた小さな器が用意されている。お茶はよく冷えた梅茶、蓋を取るとマクワウリ二切れに小さな花が添えられている。準備してくれた尼僧さんたちの女性らしい細やかな心遣いが感じられた。そのような優しい雰囲気の中での歓談は実に楽しかった。



“最後の歓談”

「どうか、みなさん、わが寺のテンプルステイに一人でも多くの日本の方々が来て下さるようお願いいたします」

これに答えて私が以下のように発言した。

「このソウルには多くの日本企業が進出してきており、駐在員とその家族を合わせると数千人の日本

人社会が構成されています。そして、SJC（ソウル・ジャパン・クラブ）という組織があります。テンプルステイは彼らの恰好のレジャーになると思いますから、SJCへの働きかけは非常に効果的だと思いますので、検討されてはいかがでしょうか」

かつてのソウル駐在の経験が思わぬところで役に立ったようで、3泊4日の有意義なツアーのいい締めくくりが出来たと感じた。

今回、私は4年ぶりの韓国訪問であったので、旧知の人々と会うためにソウルに居残ることとし、一行とはこの津寛寺で別れを告げた。

実に得難い経験であった。現在、韓国では100カ所余の寺院がテンプルステイを実施しているが、それらはすべて韓国仏教文化事業団と提携し、広報も事業団のシステムに組み込まれて機能的に行われている。それは、前述の通りスタートが2002年と歴史も比較的浅く、百カ所余りといったほど良い規模であるからだと思われる。ただ、海外からの予約を受けるシステム

が確立しているとは言えず、また、団体を受け入れる体制も十分に整っていないようで、この点が今後に残された課題のようだ。

一方、日本の宿坊と言えば、なんと言っても高野山がその代表格だが、インターネットで調べたところ、この地域だけで実に五十余りのお寺が宿坊を提供している。まさに宿坊の大手デパートと言ったところである。しかし、日本全国には多数のお寺が宿坊を提供しているが、そのほとんどは言わば小さな町の個人商店で、それだからこそその良さを持っているのではないかと思う。

今回、韓国のテンプルステイを体験し、我が国も日本の宿坊の魅力を組織的にPRする方策を検討してみる必要があるのではないかと思った次第である。

なお、ご参考までに、韓国仏教文化事業団のホームページを以下に掲げておく。

www.templestay.com

(注：本稿の作成に当たっては、(株)インターナショナル・コミュニケーションのご協力を得ました)